

## 中国人学生と日本人学生の協同学習の研究 ——中国文化体験プログラムを中心に——

荻原桂子（九州女子大学教授）・黄冬柏（九州共立大学教授）

沙秀程（九州共立大学教授）・方如偉（九州女子大学教授）

梁暹（上海海洋大学副教授）

（2018年10月24日受付、2018年12月10日受理）

### はじめに

本学海外協定校からの中国人留学生のための環境整備と教材開発について、本学における日本語教育と上海海洋大学における日本語教育の実態を両校で共同研究している。中国人留学生の日本語教育の方法に関する研究とともに、日本人学生と中国人学生の協同学習も実施した。2018年9月3日から9月9日まで、日本人学生と中国人学生の協同学習である「中国文化体験プログラム」が実施され、九州女子大学から9名、九州共立大学から10名計19名（男子6名・女子13名）の学生が参加した。海外協定校である上海海洋大学で実施される「中国文化体験プログラム」への参加は本年度で3回目になる。海外協定校における日本語教育の実態調査研究は、九州女子大学と九州共立大学の教員及び学生が本プログラムに参加することによって、中国人学生と日本人学生の協同学習が実現し、海外協定校との国際交流を深める重要な機会になった。

### 1. 中国人学生と日本人学生の協同学習

本研究は、海外協定校における中国人学生の日本語教育の実態を調査すると同時に、中国語圏への短期海外研修が日本人学生の学習意識にどのような影響を及ぼすかという調査である。さらに、海外協定校での中国人学生と日本人学生の協同学習がもたらした国際交流の成果について検証するものである。

日本語教育とは、外国人のためだけではなく日本人のためにも重要ではないか。日本語を外から見ると、日本語や日本文化について知らなかったことがたくさんあることに気づかされる。情報化・国際化が声高にさげられる現代社会において、日本語や日本文化の知識と運用能力が必要とされる場面が多くなってきた。日本語を母語として内側に抱え込むのではなく、日本語を外国語として学習する人々とともに学ぶという協同学習について論究する。

日本語を外国語として学習する中国人学生とともに、日本人学生も外国語として日本語をみてみるとさまざまな発見がある。中国人学生の日本語学習をサポートすることで、日本人学生の日本語に対する意識が変化するのである。

言語を学習するのは、しぐさや外見などでは表せない思想や意見を具体的に相手に伝える

ためである。母語にくわえて、母語以外の第二言語で自分の思想や意見を相手に伝えるというについて考える。母語でない第二言語で自国の言語しか知らない相手に自分の思想や意見を伝えるということは困難なことである。母語では不自由しなかった日常会話も第二言語となると思うようにいかないということは多々ある。

谷口すみ子氏は言語学習について、「言語は自己実現の手段だと考えます。そして第二言語を学習する目的とは、異なる文化・社会においても、自分が自分であるために、生活を確立し、自分の人となりを的確に伝えることのできることを使って、周りの人たちと協働的な関係を作っていくことではないか」<sup>1</sup>と指摘している。つまり、第二言語を学習するのは未知の人々と新しい関係を切り開いていくための「手段」だといえる。外国語学習の目的は単に言語を学習することにあるのではなく、言語をとおして自分と未知なる世界の間をつくるためといえる。すなわち、「外国語を学習するということは、言語に関する知識を覚えて使えるようになるということだけでなく、それ以外の領域でもなんらかの変化を引き起こす」<sup>2</sup>のである。多文化共生が話題となることが多い現代社会において他者への関心は、コミュニケーションの原点である。情報化社会においては、情報にばかり関心がいつて活きた他者への理解・関心が害われている傾向がある。尾崎明人氏は「日本人が外国人とのコミュニケーションを成功させたいと考えて、努力しない限り、外国人の日本語能力が伸びても円滑なコミュニケーションは保証されない」<sup>3</sup>と指摘する。さまざまな異なった背景をもった人びととのコミュニケーション能力の向上という視点からも日本語教育は、協同学習の課題として重要であると考えられる。外国人のための日本語教育というよりも、相互理解のためのコミュニケーションツールとして日本語を相互に理解し、学び合う姿勢がなによりも大切である。日本語教育で重要なことは、中国人学生と日本人学生が双方向から文化理解及び人間理解を深め、積極的な相互理解を生み出すために協同学習という方法で実践することである。

上海海洋大学における中国文化体験プログラムでは、九州女子大学の学生9名、九州共立大学の学生10名の合計19名の日本人学生と上海海洋大学の中国人学生5名との協同学習が実施された。1週間という短い期間のプログラムではあったが、上海海洋大学の教職員と学生ボランティアの素晴らしいチームワークによって、日本人学生は日本では体験できない貴重な協同学習を実践できた。その重要な鍵は、上海海洋大学の学生の日本語能力の高さにある。国際交流に一番大切なものは、なんといっても語学力につきる。教科書で習った語学力だけでなく、実際の場面で外国人とコミュニケーションがとれる外国語運用能力にかかっている。上海海洋大学日本語学部のボランティア学生は、ほとんど日本に一度も来たことがないという。にもかかわらず、彼らは流暢に日本語で日本人学生とコミュニケーションしている。外国に来ているのに、日本語でコミュニケーションをとっていることに不自然を感じなければならぬはずだが、そうしたことを一切感じさせないほど、上海海洋大学の中国人学生の日本語運用能力は優れている。日本人学生が、当たり前のように中国人学生に日本語で

コミュニケーションをとってもらふ姿に、自分自身の語学力を含めて少なからず違和感と危機感を持った。

## 2. 上海海洋大学における中国文化体験プログラム

語用論的転移<sup>4</sup>と社会言語学<sup>5</sup>的転移を深く理解することは、第二言語学習には大切である。日常言語能力は自国で学習することができるが、認知学習言語能力は外国文化のなかで外国人と交わりながらでないと身につかないし、相手の文化への興味や実利があるほうが伸びやすい。短期留学は外国語学習のモチベーションへの効果がある。グローバルな視点に立った世界観が一般化するなかで、外国語学習は以前にも増して現代を生きぬく知性の要件であり、外国人とのコミュニケーション重視の学習効果が問われている。

言語間の距離が外国語習得の難易度に影響があることから中国語と日本語の距離は英語ほど離れてはいない<sup>6</sup>。日本語は漢字文化圏に属することから、日本語に多用される漢語は比較的共通性をもっている。しかし、孤立語である中国語とは違って日本語は膠着語という特性から、助詞・助動詞の使い方が中国人には難しい。こうした中国語と日本語の距離を正しく理解し、両言語の特性を学び、思考パターンや文化にいたるまでを含めた言語観を身につけることが大切である。中国人学生が日本語を学習する際、日本人学生が加わることで、日本語と中国語の差異に相互にかかわることができる。同じことが、日本人学生が中国語を学習する際にもいえる。今回のプログラムは、上海海洋大学日本語学部の学生4名と日本語学部以外の学生1名計5名のボランティアが日本人学生の中国文化体験のサポートをしてくれた。5名の中国人学生ボランティアとの出会いは、日本人学生にとって忘れられないものになったに違いない。2018年9月3日、福岡空港を15時40分に出発するはずであった飛行機は天候不良のため3時間ほど到着が遅れた。初日から疲労して上海に到着した私たちを迎えてくれたのは、やはり上海浦東空港で3時間以上待っていてくれた上海海洋大学の学生であった。

本プログラムは彼らの友好への絶え間ない努力がなければ成功しないものであった。中国人学生の笑顔に包まれた1週間は、上海浦東空港での出会いから始まった。浦東空港で、私たちを迎えてくれた上海海洋大学の中国人学生は、左側からTさん、Tくん、Sくん、Oさん、Kさんである(写真1)。Sくんは、経済学部3年で卒業後日本の大学院に進学して経済の研究をしたいという将来の夢があり、日本語の実力を試してみたいということで本プログラムのボランティアを志願したという。日本語は独学で、



写真1 上海海洋大学の学生ボランティア

アニメやゲーム、日本語自習アプリを使って勉強したという。文法的にも語法的にもとても流暢な日本語を使っていた。分からない日本語があるとすぐに翻訳アプリで調べ、日本人学生に熱心に尋ねる場面がしばしばあった。

第3回中国文化体験プログラム（上海海洋大学）期間：9月3日（月）～9月9日（日）

月日	曜日	時間	活動	場所・手段
9/3	月		CA916便 18:00福岡発 19:00上海浦東着 上海浦東空港⇒上海海洋大学（SHOU）	大学バス
9/4	火	7:00- 8:30 9:00- 9:30 9:30-11:30  11:30- 13:30-16:30 17:00-	朝食 開講式（研修オリエンテーション）（梁暹先生） 中国の楽器鑑賞---古箏（曹原先生）、笛、二胡 （劉軍先生）日本人学生の自己紹介  昼食 中国航海博物館見学、南汇嘴公園・滴水湖散策 歓迎会	第三食堂 日本語実訓室   第三食堂 大学バス 小紹興
9/5	水	7:00- 8:00 8:30-  昼 午後	朝食 ロビー集合。バスで東方明珠タワーへ 解散 各グループ地下鉄で移動 各グループで中国家庭訪問（昼食は家庭料理） 豫園散策、夕食（自己負担）バンドの夜景観賞 地下鉄でSHOUへ	第三食堂 バス 地下鉄  タクシー 地下鉄
9/6	木	7:00- 8:00 8:30-11:40 12:00- 13:30-16:30 17:00-	朝食 赤い中国結び・中国の書道  昼食 卓球大会&日本語科学生との交流会、武術教室 夕食	第三食堂 校友の家 第三食堂 労働組合 第三食堂
9/7	金	7:00-7:40 8:00-  21:00	朝食 バスで上海ディズニーランドへ グループ活動、昼食、夕食（自己負担）  花火鑑賞後集合、バスでSHOUへ	第三食堂 大学バス  大学バス
9/8	土	7:00-8:30 9:00 10:30- 17:00-	朝食 振り返り・アンケート・閉講式（梁暹先生） 送別会 午後は各グループで自由行動 夕食	第三食堂 日本語実訓室 海天苑 第三食堂
9/9	日	7:00-8:00 9:00	朝食 ロビー集合、SHOU出発⇒上海浦東空港 CA915便 12:10上海浦東発 14:40福岡着	第三食堂 大学バス

上海海洋大学実施担当者

上海海洋大学日本語学部 梁 暹  
 周 艶紅  
 趙 凌梅  
 張 曉蘭  
 大学英语学部 楊 徳民  
 外国語学院教務係り 徐 芸菊

九州共立大学・九州女子大学実施担当者

九州共立大学 沙 秀程  
 黄 冬柏  
 九州女子大学 荻原桂子  
 方 如偉  
 国際交流・留学生支援室 黒木隆善  
 沈 若水

海外協定校である上海海洋大学と九州共立大学・九州女子大学のスタッフ全員によるチームワークがバランス良く、参加する日本人学生の意識も毎年高くなり、最大限の効果を発揮している。教職員、学生合わせて30名の本プログラムへの熱意が一致団結した結果である(写真2)。

6日目午前中の参加者全員による振り返りにおいて、上海海洋大学が作成した本プログラムに関するアンケートが実施され、閉講式には梁暹先生によって一人一人に修了証が授与された。帰国後は、参加学生19名がアンケート、報告書、レポートを提出している。調査結果は上海海洋大学と共有され、改善点は速やかに次回のプログラムに反映されている。



写真2 上海海洋大学の歓迎ムード



写真3 研究生交流センター

今回の宿泊先は上海海洋大学構内にある研究生交流センターであった(写真3)。プログラム実施場所に各自歩いていけたので大変便利であった。上海海洋大学の学生は、大学構内にある寮に生活しているので、プログラム実施期間中、睡眠時間以外はほぼ1日中日本人学生と過ごしてくれた。構内の学食での食事、早朝からボランティアの学生がサポートしてくれた。食事は初日のオリエンテーションで渡された食券を各自で使用する。日本人学生が研修中の生活に困らないように細かい配慮がされていたのは、上海海洋大学の担当者の温かい心配りだと感謝している。



写真4 研修オリエンテーション

2日目は、梁暹先生による開講式があり、続いて周艶紅先生による研修のオリエンテーションが実施された。これから活動する日本人学生のグループ分けと中国人学生ボランティアのマッチングが行われた。本プログラムはグループ行動が主になるため、この作業はプログラムを成功させるために重要であり、日中学生の相互協力が必要となる（写真4）。

開講式のあと、日本人学生と中国人学生による日中文化交流が行われた。日本語学部の劉軍先生が笛と二胡の実演後、直接日本人学生に笛と二胡の指導が実施された（写真5・写真6）。



写真5 笛の指導



写真6 二胡の指導

中国の楽器鑑賞として、曹原先生が古箏の演奏をしてくださった。箏とは、中国では12・16・21弦など各種あるが、日本では細長い桐胴に13弦を張り、柱で調弦し、右手の親指・人差し指・中指に義甲をはめて弦を弾くが、曹先生が演奏したのは21弦の古箏である（写真7）。見事な演奏に、日本人学生も圧倒されていた。



写真7 中国の古箏



写真8 日本人学生の自己紹介

日本人学生は、事前研修のなかで自分たちができることを計画していた。その一つが中国語で自己紹介することであった。各自、中国語辞典で自分の名前を調べ発音をチェックしていたが、実際の場面になるとメモを見ながらのスピーチになった。聞いている上海海洋大学の先生方や学生は、熱心に耳を傾けながら聞き取れたという意味で拍手をしてくださった（写真8）。



写真9 中国航海博物館

午後は、大学バスで中国航海博物館へ見学に行った。上海海洋大学は上海の南東に位置し、東シナ海に面していて、主幹学部には海洋学部がある。実物大の海洋船が展示されていた（写真9）。大学バスで南汇嘴公園へ移動し、滴水湖を散策した。日本人学生と中国人学生ボランティアは、2日目にして旧知の友人のように行動していた。

初日の飛行機の遅れで中止になっていた歓迎会を小紹興で開催してもらった（写真10）。初めての中国料理専門店で、2つのテーブルに分かれて歓談しながら、日本にはない食材の説明などを聞き、中国の食文化について触れることができた。食後は、中国人ボランティアの学生とともに大学バスで研究生交流センターに戻った。



写真10 小紹興での歓迎会



写真11 東方明珠電視塔

3日目は上海市内観光に大学バスで出かけた。上海市は中国の商業・金融・工業・交通の中心地であり、北京に並ぶ国際都市である。東方明珠電視塔は上海のシンボリック的存在であり、高さ468メートル、3つの展望台から上海の街が360度見渡せる（写真11）。床がガラス張りの展望台ではスカイウォークができるようになっており、座り込んで写真をとる学生が多かった。

午後は、グループごとに行動し、それぞれのグループをサポートしてくれる中国人学生ボランティアの家庭訪問を実施した。ボランティア学生が地下鉄の1日乗車券を手配してくれて地下鉄で移動した。普通外からしか見られない家屋のなかを見せていただき、中国の家庭料理など、さまざまなもてなしを受け、日本人学生にとっては貴重な中国生活の体験ができた（写真12）。



写真12 中国の家庭料理

夕方になって、各家庭訪問を終えたグループは豫園に集合し、古い中国建築を鑑賞しながら散策した。各グループで夕食を済ませてからバンド（外灘）に向かった。上海が開港して以来、各国の金融関係や商社などが立ち並び、東方のウォール街とも呼ばれている歴史的建築物がある。中国人学生ボランティアは、相互に連絡を取り合いながら、タイトなスケジュールを効率よくこなし、日本人学生がバンドの夜景を堪能できるように奔走してくれていた。



写真13 地下鉄の様子

夜景スポットで記念写真を取り合いながら、さすがに一日中活動していたためぐったり疲れた日本人学生たちは、学生ボランティアの誘導で世界中の観光客で混雑した繁華街である南京路を歩いて人民広場から地下鉄に乗って上海海洋大学に戻った。学生ボランティアは終バスに間に合うように逆算して、全ての行動を緻密に計画してくれていた。車内でも日本人学生と中国人学生は和気あいあいと談笑しながら、1時間強の時間を過ごしていた(写真13)。上海海洋大学の先生方は学生ボランティアを信頼して、彼らの自発的な行動を尊重していた。

4日目は、大学でさまざまな中国文化を体験した。最初は、「赤い中国結び」で、専門講師から中国結びを教えていただいた。色々な結び方があるが、男子学生も女子学生も真剣に取り組んでいた。できあがると大変綺麗な飾り物ができ、講師にストラップに加工してもらう学生もいた(写真14)。書道の講師を招いて、中国書道の講義もあった。



写真14 赤い中国結び

午後は場所を移動して、日本人学生と上海海洋大学の卓球部の学生による卓球試合を行った。中国文化体験プログラムで大変工夫されていると感心するのは、大学構内で実施するプログラムと大学を出て学生ボランティアを中心にした学生同士の活動プログラムを交互に組んでいるところである。学内活動と学外活動を交互に組み合わせることで減り張りのあるプログラムになっている。学内活動だけでも、静と動という変化のある活動を展開して学生同志の結束を固めていくという相乗効果がある。7日間で日本人学生と中国人学生の協同学習が密度の濃いものとなる。卓球大会(写真15)と武術教室(写真16)は、運動が苦手な女子学生も自然と動き安い活動となっている。日本人だけでもさまざまなタイプの学生がいるなかで、一人も脱落せずに全ての活動に参加させるという難しい学習を成功させているのは、プログラムが細かい配慮と工夫で組み立てられているからである。



写真15 卓球大会



写真16 武術教室

5日目は、日本人学生が事前研修から一番期待していた上海ディズニーランドでの活動であった。大学バスが早朝から迎えに来て、日本人学生と中国人ボランティアの学生全員が乗り込んだ。学生ボランティアは、事前にアトラクションの人気度や昼食の場所やショーの時間等を綿密に調査してあって日本人学生は人気アトラクションの時間待ちが一切無い状態で、スムーズに楽しむことができた。



写真17 上海ディズニーランド

当日は雨模様の天候も幸いして、ほぼパーフェクトに上海ディズニーランドを堪能できた。恐るべき中国人学生の頭脳である。昼食の割引チケットまで入手してあって、高いと言われている構内のランチが美味しく楽しくできた。日本人学生に一切ストレスをかけないという完璧なサポートぶりであった(写真17)。



写真18 閉講式

6日目の午前中は、振り返りのアンケートが実施され、閉講式が実施された。梁暹先生から一人ずつ修了証を手渡され、周艶紅先生とのスリーショットが撮影された(写真18)。日本人学生にとっては、あっという間の1週間であった。一人一人の笑顔が本プログラムの充実度を語っている。学食で昼食をとったあと、各グループで計画を立てて自由行動となった。もうすっかり仲良くなって、お互いの意見をしっかりと聞き合える関係性ができていた。

大学からバスと地下鉄で1時間近くかかる市内にてたグループが多く、それぞれ最後の時間を親睦を深めるために過ごした。

7日目の朝がきた。早朝にもかかわらず、大学バスで空港まで送っていただいた。中国人ボランティアの学生は新学期が始まるというのに、1週間日本人学生のサポートに朝から晩まで付き合ってくれたうえに、上海浦東空港まで見送りに来てくれた。空港では、短い期間であったにも関わらず抱き合う学生、泣く学生もいる別れのシーンがあった(写真19)。



写真19 出会いから7日目の上海浦東空港

### 3. 本プログラムに関するアンケート、報告書、レポート

表1 調査対象：九州女子大学・九州共立大学

	男子 (九州共立)	女子 (九州共立)	女子 (九州女子)	計 (人)
1年	1	2	1	4
2年	1	2	7	10
3年	0	0	1	1
4年	4	0	0	4
計 (人)	6	4	9	19

アンケートは7項目あり、国際交流・留学生支援室の沈若氷氏によって、研修後回収された。①プログラムの活動内容について、②特に良かった活動内容について、③よくなかった活動内容について、④充実して欲しい活動内容について、⑤プログラムの参加費用について、⑥プログラムの実施時期について、⑦プログラムの総合評価について質問した。

表2 プログラムの活動内容

	大変良い	良い	普通	悪い	大変悪い	計 (人)
九州女子大学	6	3	0	0	0	9
九州共立大学	6	4	0	0	0	10
計 (人)	12	7	0	0	0	19

プログラムの活動内容に関して、参加者全員が大変良い・良いと回答している。

表3 特に良かった活動内容 (複数回答)

	武術教室	東方明珠・豫園・バンド	上海ディズニーランド	SHOU 学生の家庭訪問	中国結び・中国書道	自由時間	計 (人)
九州女子大学	0	3	7	4	0	1	15
九州共立大学	4	4	4	4	3	3	22
計 (人)	4	7	11	8	3	4	37

特に良かった活動内容に関しては、両大学で上海ディズニーランドに人気があり、上海海洋大学の学生ボランティアの家庭への訪問も良い体験であったと回答している。

表4 良くなかった活動内容（複数回答）

	中国航海博物館・・滴水湖南汇嘴公園	武術教室	SHOU学生 の家庭訪問	中国結び・ 中国書道	特になし	計（人）
九州女子大学	0	1	1	2	5	9
九州共立大学	4	0	0	0	6	10
計（人）	4	1	1	2	11	19

良くなかった活動内容に関しては、全体として少なかったが、中国書道が体験型ではなく、講義だったので難しかったということがある。

表5 充実して欲しい活動内容（複数回答）

	宿泊先 空調	自由時間 を増やす	バトミントン・バ スケット ボール	日本人 学生が 日本料理 を披露	書道の 実技体験	特になし	計（人）
九州女子大学	0	0	0	0	2	7	9
九州共立大学	1	1	1	1	0	6	10
計（人）	1	1	1	1	2	13	19

充実して欲しい活動内容に関しても、全体的に少なかったが良くなかった活動と同じで、書道は体験型にして欲しいという意見があった。

表6 プログラムの参加費用

	安い	適切である	適切だが学生 として気軽に 参加できない	高い	計（人）
九州女子大学	2	6	1	0	9
九州共立大学	2	7	1	0	10
計（人）	4	13	2	0	19

プログラムの参加費用に関しては、上海海洋大学の宿舎、学食を使用したため最少額で実施できたことがわかる。

表7 プログラムの実施時期

	適切である	適切ではない	計 (人)
九州女子大学	9	0	9
九州共立大学	10	0	10
計 (人)	19	0	19

プログラムの実施時期に関しても、両大学の試験期間や上海海洋大学の新学期開始の時期を考慮して支障のない設定をしたので、参加者全員が適切であると回答している。

表8 プログラムの総合評価について

	大変良い	良い	普通	計 (人)
九州女子大学	6	3	0	9
九州共立大学	8	2	0	10
計 (人)	14	5	0	19

本プログラムの総合評価として、九州女子大学・九州共立大学の参加者全員が「大変良い」「良い」と回答している。九州女子大学の学生からは「すごく楽しかったです」「現地の食べ物、建物、そして中国の学生の考え方など、色々良い体験になった」「中国語が全く分からなくても常に中国の学生ボランティアの方がそばにいてくれたため、言語に対する不安は全くなかった。とても良い経験になった」「初めて海外に行く人にとっては、とても安全で充実したプログラムだと思った。引率の先生がいて、上海の学生さんは日本語が話せて、参加費がそこまで高くなくて、安心して行けた」「上海海洋大学の学生さんが想像して以上に日本語が上手で不安だった中国人とのコミュニケーション面も難なく楽しくできた」「1週間という短い期間ではあったが有意義な時間を過ごすことができた」「慣れない環境での生活でかなり疲労も溜まっていたので、先方が用意してくれたバスは本当に有難かった」というコメントがあった。

九州共立大学の学生からは「毎日充実しており、大変楽しかった」「1週間という時間だったが、日程が密に組まれていて良かった」「ボランティアの学生に本当に良くしてもらった」「これまでにない貴重な体験ができとても満足している」「上海海洋大学の学生と関わってよかった」「上海海洋大学の学生も先生方も良い人ばかりで、プログラムもとても充実していて、たくさん交流ができてとても良い経験になった」「中国のことを知ることができて嬉しい」「ちょっとした留学を味わうことができた」「上海は中国の経済都市であり、改善するところもあるが、何度行っても違う風景が見られると思う」というコメントがあった。

## おわりに

海外協定校への短期海外研修は、日本人学生が中国文化を体験するためのプログラムであり、中国語を学ぶための語学研修ではない。本プログラムに参加する学生が、教養科目で中国語を学んだことはあるが実際の中国語会話ができないのに対して、上海海洋大学日本語学部の学生は日本語を外国語として専門に学習している。日本人学生は海外研修をしているにもかかわらず、中国人学生が日本人学生に対して流暢な日本語で対応するため、一切中国語を話さずにすむという転倒が起こっている。本来なら、中国を訪れる日本人学生が外国語である中国語を使ってプログラムに参加すべきであるのに、上海海洋大学の学生に頼り切りになっているという問題点がある。今後の課題として、プログラムに参加する日本人学生に対する事前研修としての中国語学習がある。

帰国後のレポートには、「予想以上の楽しい思い出と経験を得ることができた」「毎日が新鮮な発見であった」「上海ディズニーランドが楽しかった」「東方明珠電視塔からの景色が素晴らしかった」「バンドの景色が綺麗だった」「本当に楽しい1週間だった」といった表面的な感想以外に、両大学の日本人学生は、「中国文化や歴史社会について」「上海海洋大学の中国人学生について」「中国文化体験プログラムによる自分の変化について」といった短期留学によって得られた学習体験を具体的に述べている。

### 中国文化や歴史社会について

- ・日本とは違う文化や習慣を味わうことができた。
- ・中国の伝統的な音楽を知ることができた。
- ・中国の食費や交通費が日本と比べて安い。
- ・中国の食文化、人間力、考え方、全て日本とは異なっていて、7日間では全て知るのには難しいと感じた。

### 上海海洋大学の中国人学生について

- ・バイトや遊ぶ時間を削って努力する姿に衝撃を受けた。
- ・上海海洋大学の学生は日本語が上手で頑張って勉強したのが伝わってきた。
- ・ボランティア学生の実家への訪問では中国人の家内や日常生活を見ることができた。
- ・上海海洋大学の中国人学生の日本語力とコミュニケーション力に驚いた。
- ・通訳をしてくれ、何か困った時は相談相手になり、純粹に日本人学生のサポートを当たり前のようにできることがすごいと思った。
- ・Sくんが独学で日本語を1年間勉強してとても流暢に話せていたことは尊敬する。
- ・同じ大学生なのにこんなにも違うのに驚愕した。
- ・上海ディズニーランドではボランティアの学生が事前にアトラクションを予約してくれていて当日スムーズに行動することができた。

## 中国文化体験プログラムによる自分の変化について

- ・自分の価値観が広がった。
- ・もっとたくさんの国に行きたいと強く思うようになった。
- ・テレビの情報からうわべだけの中国を見ていたが実際中国に行ってみて考えが変わった。
- ・大切なのは文化や価値観が違うなかでもそれを否定するのではなく、受け入れてリスペクトの気持ちを持つことが大切である。
- ・上海での出会いは私の人生を大きく左右するものとなり、私も人に何か与えられるような人になりたいと強く思った。
- ・いい刺激を受けて帰国することができたので、この気持ちを忘れずに学生のうちに学ぶことを学んで、やりたい勉強やとりたい資格に向けて頑張ろうと思った。
- ・1週間という短い期間ではあったがこの体験は私の視野を広げてくれた貴重なものだった。
- ・外国人の友だちができるとは思っていなかったし、今でも中国人学生とSNSを通じて交流が続いている。
- ・学生ボランティアは、日本人学生が何不自由なく研修を終わらせるために夜遅くまで計画を練っていたと聞いた。
- ・自分が通る道が少しずつ見えてきた。

## 中国文化・中国語について

- ・生の中国語に触れることができますます興味が湧いた。
- ・もっと中国の文化や言語について学んでいけば良かった。
- ・もっと中国人学生と仲良くなりたいと思ったのと中国語を学びたいと感じた。
- ・自己紹介のときに、もっとたくさん中国語でできるようにしておきたかった。
- ・中国語を勉強して、もっとたくさんの中国人と会話したかった。
- ・中国語を履修していたにもかかわらず中国語を少しも活かすことができなかった。
- ・もう一度中国語をしっかりと勉強して次はもっと長く留学に行き、中国語を話せるようになりたいと思った。

上記の学生たちの帰国後のレポートから、短期留学は第二言語習得に対して文化的、言語的、心理的に肯定的な影響を及ぼすことがわかる<sup>7</sup>。今回中国文化体験プログラムで取り組んだ中国人学生と日本人学生の協同学習は、帰国後本学に在籍する中国人留学生に対する日本語教育に活用することができる。心理的、文化的、言語的な肯定的影響として、日本人学生のなかには、日本語教員を志望するものもいる。外国人に日本語を教えるという逆の体験をとおして、将来の仕事への導入にも繋がる。中国人留学生とともに日本語や日本文化を学習することは、自国の言語や文化に対する認識の深化と視野の拡大をもたらすことになる。

今後の課題として、プログラムへの参加希望者には事前の研修において中国文化や中国語に対する学習を促し、参加者には中国語学習に対するモチベーションや態度を高めると同

時に、研修後も継続して、中国語学習に取り組むことを促すことが重要である。さらに、本学に在籍する中国人留学生に日本語を教えるという日本人学生の日本語教育能力の向上をはかることも今後の課題である。

付記：本稿は、平成30年度海外協定校協同研究プログラム（「国際交流における留学生の受入促進と日本人学生の海外留学促進に関する研究」研究代表者：荻原桂子）の助成を受けて行った研究に基づき作成したものである。上海海洋大学国際交流処処長鐘俊生教授、外国語学院日本語学部劉軍教授をはじめ、先生方および学生ボランティアには大変お世話になった。また、国際交流・留学生支援室長黒木隆善准教授、沈若氷氏には大変御尽力いただいた。ここに記して感謝の意を表す。

#### 注

- <sup>1</sup> 谷口すみ子(2001)「何が学習されなければならないか」青木直子、尾崎明人、土岐哲編『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社pp.16-17。
- <sup>2</sup> 谷口すみ子 同掲書、p.17。
- <sup>3</sup> 尾崎明人(2001)「日本語教育はだれのものか」青木直子、尾崎明人、土岐哲編『日本語教育を学ぶ人のために』世界思想社p.5。
- <sup>4</sup> 「ことばは、文法的に正しいかとは別に、社会的な文脈の中で、そのときの状況や聞き手が誰かなどさまざまなことを考えて適切に使わなければならない。第二言語使用者が母語での適切さを基に第二言語を使うためにおこる言語転移を語用論的転移（プラグマティック・トランスファー）と呼ぶ」岩田一成他(2012)『日本語教育能力検定試験に合格するための用語集』アルクp.88
- <sup>5</sup> 「言語学は長い間、文字どおり「言語」のみを研究対象として取り扱ってきた。しかし、20世紀の中ごろから、言語と社会との相互作用を重視する研究者が現れた。その中でも言語とそれが使用される社会（人間集団、コミュニティ）との関係を明らかにしようとするのが社会言語学である」岩田一成他(2012)『日本語教育能力検定試験に合格するための用語集』アルクp56
- <sup>6</sup> 白井恭弘（2008）「学習者の母語と学習対象となる言語が似ていれば似ているほど、つまり距離が近ければ近いほど、全体としては学習しやすい」と述べ、「言語間の距離」について指摘している。『外国語学習の科学——第二言語習得論とは何か』岩波書店p.2。
- <sup>7</sup> 小林千穂（2017）「英語圏への留学が日本人大学生の英語学習モチベーションや態度にどのような影響を及ぼすかについて「学習者が留学中の異文化接触体験を通して、英語を使う自己を具体的に描けるようになった結果、英語学習に対して意欲的な態度を見せるようになった」と指摘している。「短期留学の外国語学習モチベーションへの効果」『天理大学学报』68巻2号p.1

## **A study on cooperative learning by Chinese students and Japanese students : Focusing on a Chinese cultural experience program in Shanghai Ocean University**

Keiko OGIHARA

Department of Human Life Studies, Kyushu Women's University

Dongbai HUANG

Faculty of Economics, Kyushu Kyoritsu University

Xiucheng SHA

Division of General Education, Kyushu Kyoritsu University

Ruwei FANG

Division of General Education, Women's University

Liang XIAN

School of Foreign Languages, Shanghai Ocean University,

1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kita-Kyusyu City, Fukuoka, 807-8586, Japan

### **Abstract**

We are collaborating on Japanese language education at our university and Japanese language education at Shanghai Ocean University for collaboration between Chinese university and foreign students from our university overseas agreement school for environment improvement and teaching material development in Japanese language education. In addition to research on the method of Japanese language education by Chinese international students, cooperative learning of Japanese students and Chinese students was also conducted. From September 3, 2018 to September 9 (7 days), the “Chinese Culture Experience Program”, a cooperative study between Japanese students and Chinese students, was implemented. 9 students from Kyushu Women's University and 10 from Kyushu Kyoritsu University participated in a total of 19 students (6 boys and 13 girls). Participation in the “Chinese Cultural Experience Program” to be held at Shanghai Ocean University, an overseas agreement school, will be the third in this fiscal year. For future work, we encourage applicants to participate in the program to learn about Chinese culture and Chinese in advance training, and to motivate participants to motivate and attitudes towards Chinese language learning. At the same time, I think it is important to improve the Japanese language education ability of Japanese students to teach Japanese to Chinese students.